其十二

十二源氏袖鑑

五

源氏袖鏡巻五

十　あ

十一　みお

廿　よも

同　せま

宮内庁書陵部

源氏

十　明石

豊宮崎文庫

安藤文庫

[illegible]

[illegible]

なりぬいて地[illegible]

れき[illegible]たるやこのうちわたりとも

[illegible]まる人[illegible]

しきたりにくく[illegible]

も[illegible]しうちの[illegible]のおれあきれなむつま

[illegible]おかさま[illegible]やはおよめかて

京の事と[illegible]をいなつりくと[illegible]

をうつくしうすれば又ふかきなりもあり
あれども第上
うら風やいふかの山もん切りしやる神うちぬ
所はまれきこゝろは風いきすうやまこゝ
海ふかきのかりておもあるまうわり
うに心かそまもなかなる源氏
海まます秋のうきけよかうすいきの
やとあひふさきへうる海つうちちすう
のうれまてあるまていうちおちかり源
氏れたてまうらうしもうらうふけぬう

わたりの海のうたなり知かいなと
知りき所ようてをりてよとなくうち
うみくいうらうて月はいおくちかのちく
うちうあもあうふあおをとせうる浪
のうまれ紫の戸をあけてうあ知さく
よわかく海うちまよはこの月のみとこ
えなてなくあやしき所うにあちうと
はをうてひきたてのふ住吉の神社
ひきなまにやあるてはうしなきれ
とのまはれ月のうちにあるをかすうては

ともよまうちんとうきいてうちんあけぬ人
見ハ人も明月のうかりきくこゝろく
美はしらもきす沼をひきまわるやりみ
みやみしまてきさに称いつまをはやもあ
てあつまきるになるふきさたちつきやる
沼あをせて人三人ひとのはやりをさ
て系わくようきよ紙よひあておれたる海の
つあつの入るよりあ源氏のはむひまり
ようりそのゆへ三月ニるこの日れたく人
あるをも秋はんの入るよ位ちの秋乃

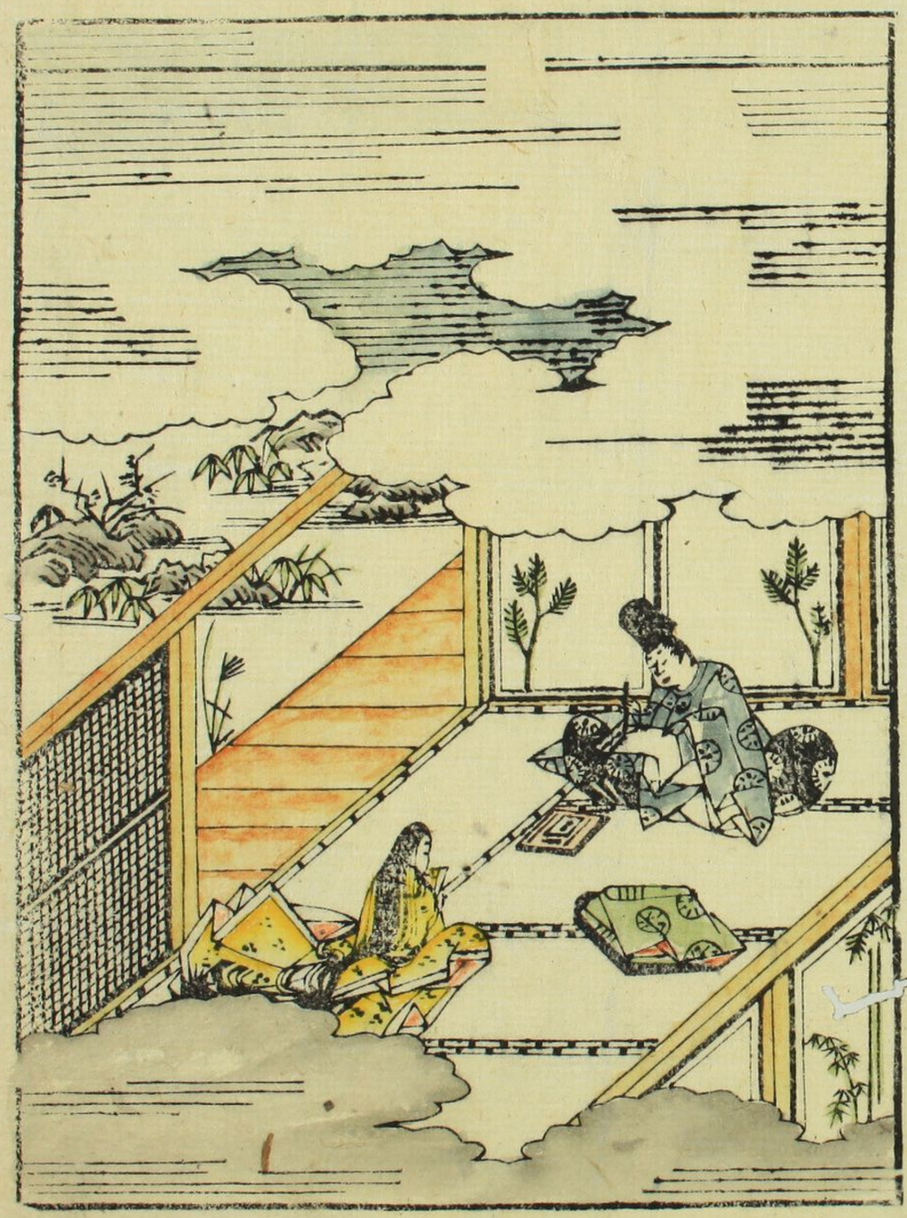
ゆめたつをみるありすニるおあるたるる
しみをん春よりひまうけくるるしたる海の
海へたてまつれとるるり　明石の君ハけ　源
氏へひうたに入れいちはつの君ハ中も
ちめ　御　事をいハ何をうるうんを過
めるくハ春よりて沼のうへうるり
ぞまてハ海
にくのすうり　三月ニるを也ちくひるるる
る時のまとハ人も和れあやしきまてみるる風
の心なりはうう嶋くるるやるる明石ちはき
拾ぬ春よりハ事よ　なるうつを秋日やく

さしあてものふかんまうあひとつれ
よそひのつくりてへるいせんはらの神を
みくはなをもう入道乃つまやうしうる所く
うこのれもてもれくまうをさうすつきなれ
さりとまやおそるひとりて後の世をこのを
ますへき山水のつたいくたうをそて
こまいおこれよ世のたくさんなれのたの氏
りおさめのうれよりひつむへきいれのうの所
も所よつけてもあつをりむをめいたらい
をもてはたら器へのあるを海世さりおの

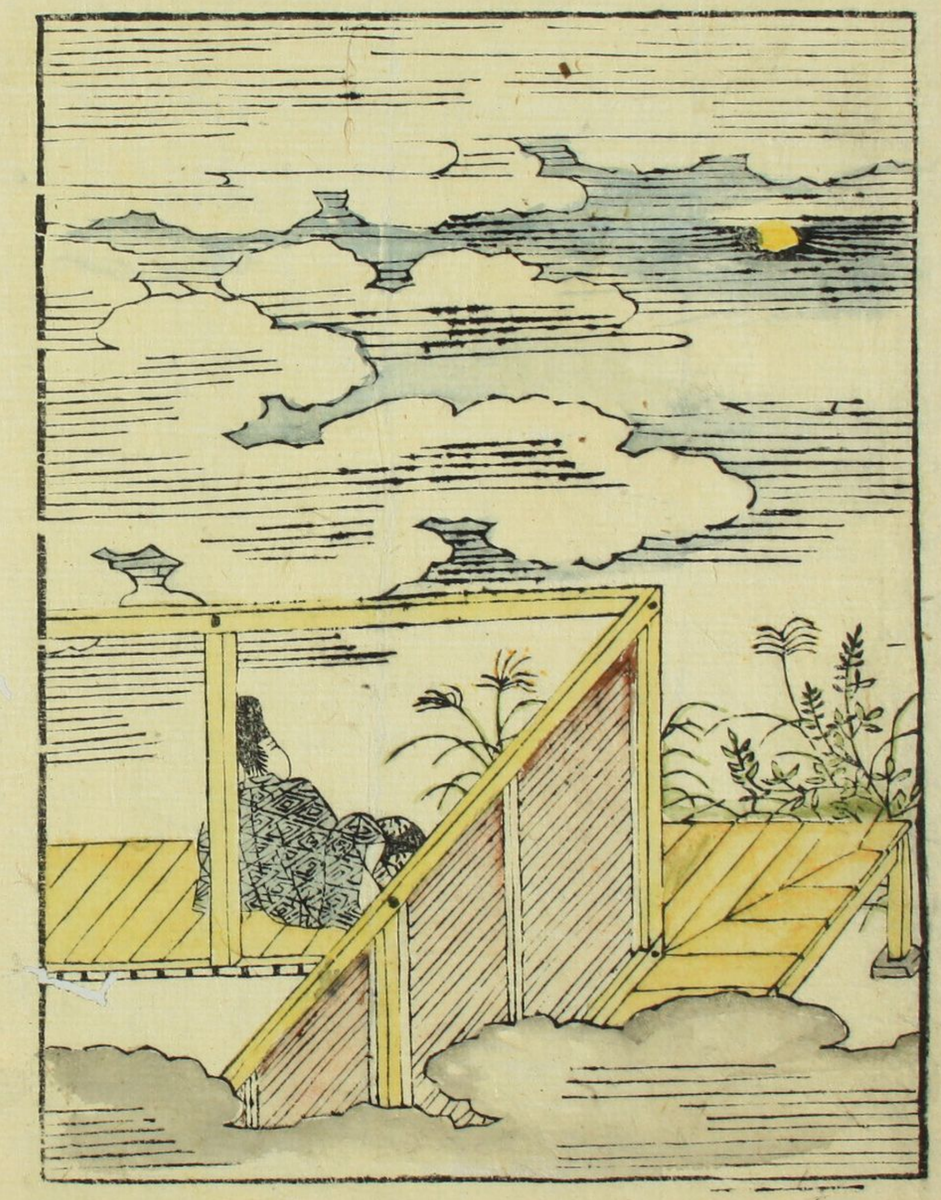
うをいうあまにすて和りいりよ
もをます源氏いを海のうちふんやもく海
まを入るのおこるひつあらを海いう和
をハ六十うも光みもあまりうりや
うくはんをりまをて京のはうをもうまのう
第上のあるれうりし和乃はをーいうをを海
里和はをくをれ和源氏
をうもをひやうるかをまりし海を
をちようをひてをのまへよみ海をを
あうし海をりをあををうをの和く

とあるに付て　あらちそのをとこうるにみし
月のちるまでこそいと所うもあれ　源氏
あをとこうのうちの海はあまれる人の
ほかにまをくをめる歌の月　夜ふかゝぬ夜りの人
のはさうそくはちやうのうさひうるまうる
さ海よりうのよつうまうひさしく年
あれはいねきんのはとうてうちうそて
てうまうとうをあうさうの海
はつうと冨人のあまをきて空の
見いうをせあうのまに人はまたうそうの人う

めり入たもえうくくうかうたはうていれき
まつりてうさにすて作世もうひあれ又は
の世よ移ひはうのうを海もはやうう取
ははまうをなくくあそまこの冨於へ題題
ちやうのことうを海うて入たいあるのうり
よりうておうまをひううはひまそうう
うあうを地はううはけまうせはるのへ
うもはけちあをてそのうを地はまれしぬ
へまを海なりこうをいい入たハもをめの事紙
とをすうにを移んうをあうりうをうう



とたくさんけうあるなかに
うらうらにたちたちとさしてとはのかけ
ひきてはくくみ新あるあるの
さてはいまぬるのうんあるのきちす
ひとり弱八表もちあやつ通くとおもい
あるのうちひさを源氏
よい紅うめ梅さよあるよ京の花い
美もむさ冴こうちみれまつけ海のよ
うすめてうを紀を入石い源おうてみて
まうの日器人の女品のうえ仕えつうえす



こゝのうちにいろはみよ源氏
をちこちもとをねやまかすみあわひのそら
ゆくへもしらぬこすゑをうらふかくいりあ
いぬるとしのくれをかなしみ
つゝ
をちこちもとをねやまかすみあわひのそら
ゆくへもしらぬこすゑをうらふかくいりあ
いぬるとしのくれをかなしみ
つゝ
入道
なにはづにさくやこのはなのはるをたれ

たゞ一こゑのみなん。その人乃日記しるす。
八月十五夜のくもりなくてあかしたる源氏
いねもせぬあけぬるかなとあかつき
のそらの人まちがほなる月を明石
おもしろかりしこゝろのおもひやりふかき
人のまてるやまんまれにまれなる海路の
やしまをこぎ人よりうとくてうらやましき
うらむしきたのうちやかりかたくて海
ひろきねぬまのやうにふねをしていりぬる
はつかくらゐをまつ八月十三夜九月のおも
しろさあてあてあのときこそあらん月をあ
よの月と花とをなすくらゐあれとまてこん人よ
みをうやりをこをおくやそはをうくたて
まちうてゆるのよれるへきあてはまれ
乃のうちものうしくこんやこのつきをふ
うちみまはまいるはの月をみまりおの
こゝろをこん人をりおく源氏
秋の夜月をのあよわりうゝ中ふ
うをこ時のまもうんとひとうこうてれて
つきたりうのをまみよりあてよ住うる音

ちきにく岩よりあいる松の梢をしたゆるさ
海かりしもをあすまを世をうかるハをにみる寺
をつくして月いまてをるまにの戸にをしまき
ちををあけをり引句　まつあのこ法やををへ
をこをうををにあけをる松のあををんむ
をめのうをて源氏

ひをををををあををん人ををあををを世の
ををををををををやをれを明をを
あけぬをにやををてをををんをいをををを
ををてをををんをををあををををををれ

ひをををををををををををををををををををの
ををををををををををををををををををををを
人をやをををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
まををんををををををををををををををををを
ぬをををををををををををををををををををを
をあををををををををををををををををををを
こをやをををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを

ちかくとまりてをゆかうめれば
めハあまれるまいるれども
きはくしきにのこ
うきもこひくれ
ぶハらしはてこうれ
ぬのはいとうのあ
あ見ハうあしはあ
みしのうりはおれ
源氏のうまを四
よりあせはりの

ぬきの
うまきて
あくしとおもうき
うるうす成はり七
きせんしうちぬいの
より入るハむのはう
うくいうをよれ
うるくはりうう
きいうもうくはう

されもうるこのうり又二条の大臣かくまは
ぬきの御のさまをうれハ源氏お
うまきてかくこはうるれそのむの
あくしとおうきはれ六月ちう女君
うるうす成はり七月はりうへまれはへ
きせんしうちぬいのやうにうるはうく
より入るハむのはうまうり源氏もうれまと
うくいうをよれまうへうと女君の名ぶ
うるくはりううしあうてうちはりい
きいうもうくはう女のうれはをも

きまふてうちきたれるすがたにほひ
ていと月をそうとく場にて東へもうんする
たのめまへも無てわうんの物のるまに
ゆてもとつりじうやくなりられのきたる
と源氏

いとしのいとわるもものはやくきりはある
しうたちのいんの色女

きつそあまのうもの場のもしまは
ひをさうみたにきて紅色へも色
紅ひきんのもの氏いは又きあわすうもそのか

ゆよそうめまへ女君
うの氏さりかたのめを紅色名一と紅はき
せぬ紅やけくものうんいあるもはもう
ひをうみまふ源氏
あまそのうもにちるる中のをもうへ
もふうもうもうん立あまもこの
色と源氏
うちまそうの氏のもはのるうは
いうあとこいやうれ女
まへはうもやもあくの人の氏の人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入道

[illegible]

[illegible]人のいとゝ源氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まくなりてゆきとしてゆきとしてうきよ
に入りぬ二条院よりおりつきて北の人とし
の人もけうあひとりらひすきもゆしきまて
立さわぎたりしかくもの語りあつまり敷
の外は猶大納言よりなりはてしものの人をも
さるへきうちの物のくもれ信よりあるを
りはてしかの去にあふしをりてありて
内よりまいりはて八月十五夜門むし
きてしの物のもとさそはるやとおもせ
られはかりこまりはてく源氏

けうとしにさるへうれしらのよりあり
てきてしをしへまりいてあれはとうら
さ物りてはいつ門
えとしらあるかく時あれは別
者はうみ物はれうてあるへうはう
きく源氏
なけきて的なのうにおきるのうりを
人をとはやうあかな乃源まにくはうより
ちよりてのうしへ去の君
はものうふらとはせ人のやうてく

しらぬ神を月をゐる源氏

かつてくいかゝやをゐるうらゝ

うゐ神乃ひかりうらゝと

十一　澪標

うらゝかぬ明石の三月十ゝ日姫君をうゝ

まつり源氏いとめつらしく思ひきこえ給

ひてくれぐれまでもてなせきこえ給へて

おなじほとりに住給ふ人の身のうきを

きせこえて心ぶかくもてなしきこえ給ふ

ゆゑのともさうの人をとりあつめ給へる

なりの人をれいの定つかはせ給ふ源氏

かはりてまゐりそめ給ふとてとゝのへ

給ふものともなりとのゝ

うちつけのなれぬ世かなとて泣ん
ことをもいやしきまねあるべくもあらぬ
まことにてのこまやかなる源氏
いつしか神うちもんをもめるよう世をへ
てかつゝ光のおひさき入るようにうちひろげて
うちうちもしまてあるはいとけうら
ほくうあるもとはもあるのと
ひとりしてうるはる神のたれきこえぬ
ぬるうのけをうちもりの月めるあるしと
いかゝのいうあるはいとうるはしうる

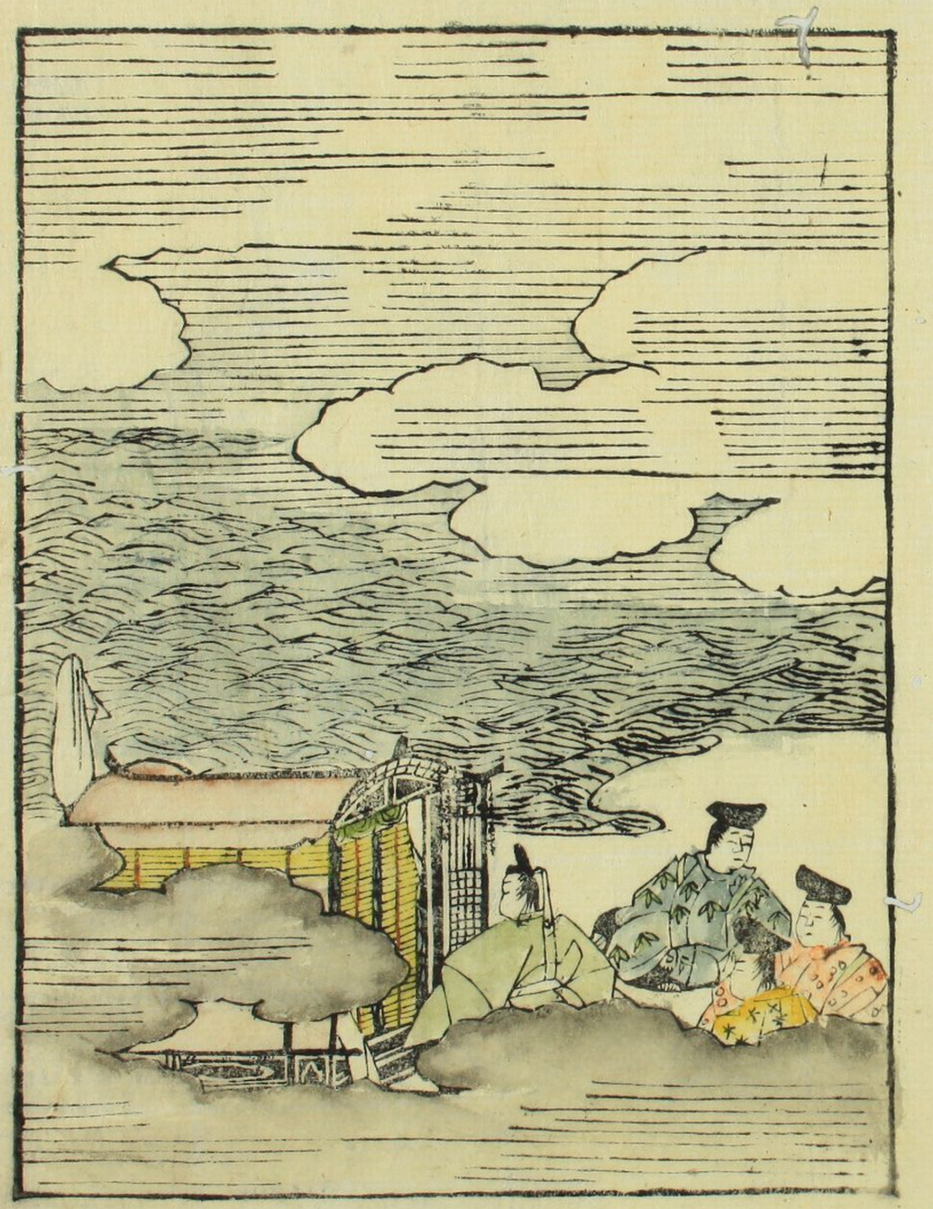
ぬる屏をうちたて給ひ　源氏
うとうかやうにたもしきけをなく何の
あやめもいふうちうんはをゆるのと
うちうるねみ屏をうれをなくうりをなふ
もいふをうをうをうきしゆをうるをうをうて
源氏あるれとうるやうふひとうるうるうる世界の上
うちうるうるみをうをせてうをうをうをうをうを
やうたひうをうをうるうるうる門をうをうる屏の御うち
をうをうをうる毎をあるをうをうをうるうる世界と
をうをうをうるひくうるあるをうるをうるれを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つるを多姫よりうけとりて
てらいそんとうもしくは所車をいろ
ゐんやうれいをうしなはれ
ともえみをもすべ夜ゆのうち名ゆ
つきたてゝふるみをうたみをまわり名
のうをまぬさ後をてゆるをまぬまるをうを
いつくしみやしろうをうけまりをふいな
まに海さーとめくとうをたせんとそわる
月ぬ山者をまわい去夜はうをみをつき拾へん
海設をいはをうとのたれ夜よゆつりを拾て



源氏は月大臣とうく海ゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

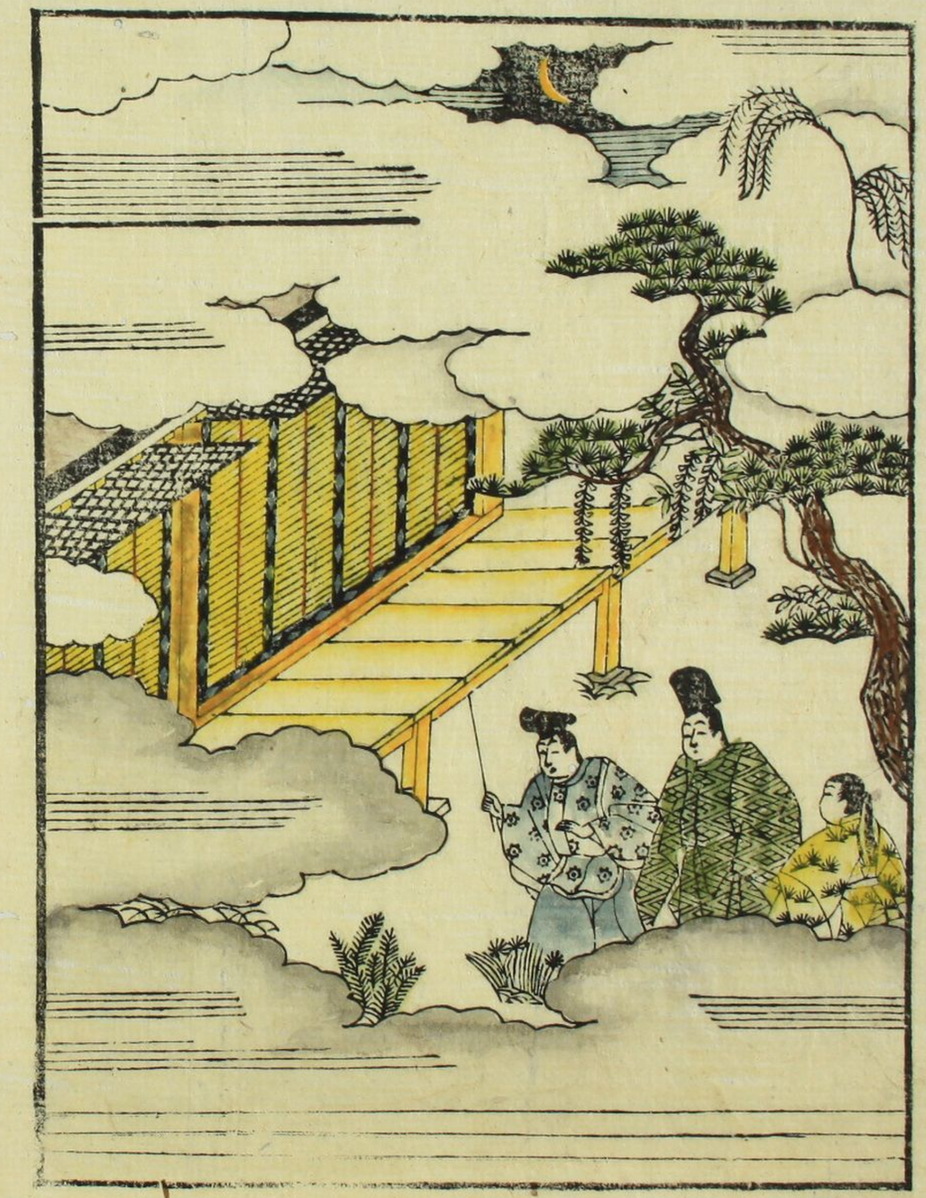
の雅経へ遣はすとて
ものの枝ばかりうちかなして四葉ばかりとり
付たるをたなるとうらんもまふを推量は
車のもとにくくりつけ侍りける
きりかけ侍りけるうらの葉を
まつ見ハ侍りてうみるあるのこと源氏
こおつてうるこ家よりまてと先ら
あひたるえうまぬるかいさるれもらめ
くあるこけるくてゆるえを
歌をてなるあるものもひるるるを多
とうて見ひてあんたにたのはんこのつさは
四方のつるへあり夕しかうるきて入はの
ふれもしるはまねおるうれハ月前ハ
のうにたかうられいるはるはるとうて
ふれきはるゆるるをあるへとうて
まれく源氏
寝けさ乃もしてふるうたの衣あるを
時のるるるれをを対あるひのるるま
りうるうるくもか乃所をハ伊勢のつき
世ものはて高を一所ものるるを拾よのう

[illegible]
[illegible]
[illegible]

并　ようもまふ

源氏を海乃うたにもよまれたりしかは
よこしなけき給人くはかりもなかりしの
ちはなのいろかをもあくはかりなるハ
源氏ものうきくまもなくとしかの
といふやうにこの身をしてはのうちも世はさ
はまりつけるをもあくをいれる大そのの
のひかりをたにのあるようてんのうちて
うしろをすなをうけるのをれようちをを
をりはまりあはまりしをのはいてき

はるのゝみとなりてこゝろ海をとりてゆきて
ぬ袖もぬるゝ心地あり　ゆくゝるのゆゑと
みゝなりてをこし給ひしゆめとも乃行
路とりひ　ゆゝもの世のをつきうれ〻ゝ
ゆくはるゝへゝるゝふゝゆゝ給ひんゝなりと
しへゆゝるゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



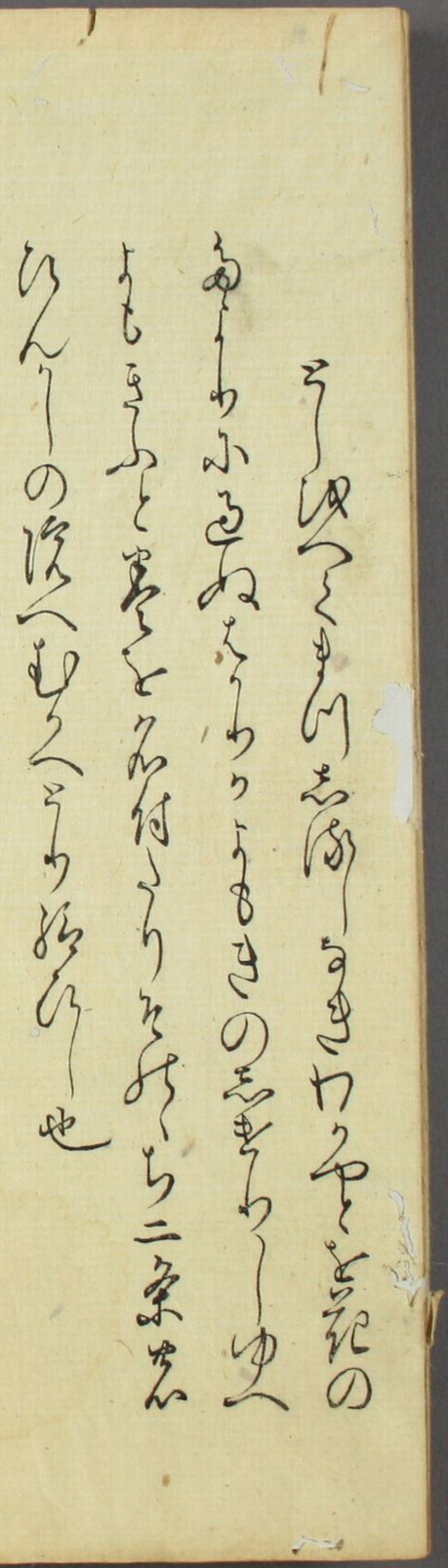
ゆきまきをなのうむうぐひす
のみよりけるれあるはるもみくさをて
むらたてもやまのはみちのまの
れ神もうけくらうん世のうきもまことと
らひとなくさあきうく人たちをれまれ
てよるもちうあまはちやうの月よりうう
きりくれとちうはうのことのあをよなりて外
まきゆるさもあくを雪もうきむうのか
けふつまうくらうの山さいやうくはす
まるよきまうけをうくうきうれはよきん

なほうへ宮まゐりたりけるに
あつまるそのうちもせうとこす國とか
きわたりとゝ新すまうてをくるに
卯月乃はしりの新しく葵をちらし
の文みえす宮ハはめくるゝいとをすくて
なゝ月よりわれらのもつるを折
のこすをくもをつむ

なほ人をうたりひまれきよ
きてうやれちうさへふけゆくれよ源氏
花ちる里へおりまよまて松よ花のさと

うちうる我ちうんしてひとうちうをとりひ
おのりきたに人をもうけいこれうあん
なりくるさの家をるれもちしてうひ
ていをまうるはきのそれおりぬ源氏
うるくも歌うとうあるしすくぬき
よりもまものをと女君さわるや給をし
ていをまるをもうをくるうくすひおり
ていとう撫くはをを源氏

花なみのうちをきてみうるふまつそ
宿のうをなるをすをつを



并　開屋

かゝ伊らの人ハひとりとりてゝ
とくさまをもてゝ
ちりに源氏ハ御覧そなはして
そてあふ坂のせきに入はてゝ
うろのうちふうしつけ
なとそなきたれあるときなやた
えぬ志ゆと人ハうるんのものへ
きめいはくりをそめ給をそ見せ心よ
ゆさとうまをあるうるハみしきんを

山ちかきにて四又あり源氏

ほとゝぎす好あるこゝろをそのこゝろ和

こゝろやこゝろあるうゝこゝろ月乃つゆ哉

うゝくしくこゝろを定

逢坂のせゝやいつこゝろをこゝろいこゝけき

なけきにせ申はまこゝんけあるよ作るのこゝろを

こゝろにて南まの河内こゝろをこゝろにて尼

まあて源氏を新こゝやこゝて赤こゝろこゝてあま

の三やこゝく汗のくまてこゝのこゝて六条院よこゝく

つこゝをまこゝをふこゝちあこゝり